



夜の女王(アルビーナ・シャギムラトヴァ)

第1幕 パミーナ(クリスティアーネ・カーク)とババゲーノの2重唱

ババゲーノ(ロランド・ヴィリヤソン)

第1幕 3人の侍女(ヨハンニ・ファン・オーストルム、コリンナ・シェウルレ、クラウディア・フックレ)、タミーノ(クラウス・フローリアン・フォークト)、ババゲーノの5重唱

3人の童子(ルカ・クーン、ジュゼッペ・マンテッロ、ルーカス・フィンクハイナ)、パミーナ

大人も子どもも、初心者も通も、 皆が楽しめたバーデン・バーデンガラコンサート

中 東生(音楽ジャーナリスト)

バーデン・バーデン祝祭歌劇場『魔笛』

7月8日 バーデン・バーデン祝祭歌劇場 所見

バーデン・バーデン祝祭歌劇場はドイツ・グラムフォンと組んで、毎年モーツアルトのオペラを録音しているが、そのシリーズの最後から2作目となる『魔笛』を生で聴く必然性がふたつあった。ひとつ目はスターテノール、ロランド・

ヴィリヤソンがババゲーノを歌うということだ。歌手になる前は、メキシコのサーカスで道化師をしていたという彼にはピッタリのキャラクターかもしれないが、バリトンの音域をホールで

どう響かせるのか、そして演出上の助けがない演奏会形式の上演でどう演じるのかは、録音では分からないからだ。

ふたつ目はヘルデンテノールのクラウス・フローリアン・フォークトがタミーノをどう歌うのか、CD用の修正なしで聴く意義があったからだ。その他、もうすぐメトロポリタン歌劇場の音楽監督に就任するヤニック・ネゼ

ガンのオペラ指揮を舞台上で目の当たりにできること、注目ソプラノのクリステイアーネ・カークやレグラ・ミューレマンが聴けるのも魅力だった。

ネゼはセガンは細部まで行き届いた指示で柔らかい音色を引き出し、ゆっくり序曲を始めたが、すぐに走る直前で留めたような超速になり、アクセントも多用して確信を持ってまとめた手腕はさすがだ。『魔笛』に必要な深さが欠けているように思えるのは、フリーメイソン発祥の大陸出身ではないためか。フオークトはいつものように、多少かすれた声で歌い出すが、完璧なタミーノを歌い、

余りある音量がさらにせいたくで、アリア「何と麗しい絵姿」は極上だった。

ヴィリヤソンは緑の羽根を付けて登場し観客の好感を一気に集めたが、音楽的完成度は高くても、オーケストラが提示する甘い柔らかさに乗る余裕はなかった。

夜の女王はサッカカーのワールドカップ開会式でも歌ったというアルビーナ・シャギムラトヴァで、歌詞の扱いが上手く、ドラマチックなアリア2曲を聴かせたが、常に下を向いて歌っていたのは残念だった。

うれしい驚きはパウエル・シュヴァイネシュターだ。タミーノも十分歌えるだろう甘さで、もったいないモノスタトスを歌った。同じく弁者のタレック・ナズミもザラストロを演じたDVDが売り出されているが、ここでは美声の先輩フランツ・ヨゼフ・ゼーリツヒに譲っていた。

カークのパミーナは、完璧なコントロールで、今日のキャストの中で一番深く掘り下げた表現を聴かせたが、もう少し自由に広がらせた声も聴きたかった。ババゲーノのミューレマンはバババの2重唱だけで観客をとりこにした。シーンに合せてヴィリヤソンが癒しのタッチで描いた背景イラストを含め、全員を幸せにするせいたくな公演であった。

2018年7月8日
バーデン・バーデン祝祭歌劇場(ドイツ)
作曲/W.A.モーツァルト
指揮/ヤニック・ネゼ
セガン
合唱/RIAS室内合唱団
管弦楽/ヨーロッパ室内管弦楽団

写真提供:バーデン・バーデン祝祭歌劇場